

短大特任教員教育研究業績書

平成30年5月1日

氏名	ふりがな	所属学科	職 位	性 別
神宮 咲希	しんぐ さき	保育学科 通信教育課程	講師	女

担当科目名

言語表現、基礎学力演習 I

学 歴

和暦(西暦)年 月	事 項	学位
平成 18(2006)年 4 月	福岡女学院大学人文学部現代文化学科 入学	
平成 22(2010)年 3 月	福岡女学院大学人文学部現代文化学科 卒業	学士(人文学)
平成 22(2010)年 4 月	福岡女学院大学大学院 人文科学研究科 比較文化専攻 入学	
平成 24(2012)年 3 月	福岡女学院大学大学院 人文科学研究科 比較文化専攻 修了	修士(比較文化学)
平成 24(2012)年 4 月	國學院大學大学院 文学研究科 文学専攻 入学	
平成 27(2015)年 3 月	國學院大學大学院 文学研究科 文学専攻 単位取得後満期退学	

教 育 歴 ・ 職 歴

名 称	期 間	教育内容又は業務内容
國學院大學大学院教務補助員(ティーチングアシスタント)	平成 26 年 5 月 ～平成 27 年 3 月	大学院の授業の授業準備・授業の司会進行・資料の作成・発表者の指導・レポートの添削を行った。また年度末には雑誌を発行したため、雑誌に掲載する論文の添削、編集、校正も行った。
小田原短期大学	平成 28 年 4 月 ～現在に至る	保育学科通信教育課程 講師

所 属 学 会 等

名 称	活動期間	活動内容(役職等の活動を含む)
古代文学会	平成 24 年 4 月～	学会参加
全国大学国語国文学会	平成 24 年 4 月～	口頭発表
東アジア比較文化国際会議	平成 24 年 4 月～	口頭発表
國學院大學國文學會	平成 24 年 4 月～	口頭発表、論文掲載、平成 25 年度学生幹事
美夫君志会	平成 29 年 4 月～	学会参加
上代文学会	平成 30 年 4 月～	学会参加

社 会 活 動 等

名 称	活動期間	活 動 内 容
福岡県春日市スマイルサポーター	平成 23 年 4 月 ～平成 24 年 3 月	春日市教育委員会より任命され、春日西中学校へと派遣された。保健室登校をしている生徒に少人数の授業を行ったり個別指導を行ったりした。

担当教科目に関する資格・免許等

名 称	取得年月	取 得 機 関
中学校教諭第一種免許状(国語)	平成 22 年 3 月	福岡県教育委員会
高等学校教諭第一種免許状(国語)	平成 22 年 3 月	福岡県教育委員会
中学校教諭専修免許状(国語)	平成 24 年 3 月	福岡県教育委員会
高等学校教諭専修免許状(国語)	平成 24 年 3 月	福岡県教育委員会

研究実績に関する事項

代表的な著書、論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概要
<p>(著書)</p> <p>1. 古事記歌謡注釈—歌謡の理論から読み解く古代歌謡の全貌</p> <p>2. 教育・保育実習に役立つ部分実習指導案集</p> <p>3. ことばの呪力—古代語から古代文学を読む—</p>	<p>共</p> <p>共</p> <p>共</p>	<p>平成26年3月</p> <p>平成30年2月</p> <p>平成30年3月</p>	<p>新典社</p> <p>萌文書林</p> <p>株式会社おうふう</p>	<p>日本最古の史書『古事記』に載る全112首の歌謡の注釈を行った。従来の古事記歌謡の注釈は、古事記本文を引きずったまま施されてきたが、本注釈書は本文と歌謡を完全に切り離して歌謡を理解したところに独自性がある。歌謡の理論から古事記歌謡を読み解くことで、歌謡がもつ性格が先にある古事記本文の説話がそれに引き寄せられているということが明らかとなった。</p> <p>(共著者：大谷歩、大塚千紗子、小野諒巳、加藤千絵美、神宮咲希、鈴木道代、高橋俊之、室屋幸恵、森淳)</p> <p>※尚、共著者全員で集まって考察を行い、注釈文を書き加えていくという執筆方法を取ったため、担当部分を明確にすることは出来ない。</p> <p>音楽表現・身体表現・言語表現・造形表現に関する部分実習指導案を集めたものである。言語表現の指導案として pp.97-99「くだものカード遊び」(2歳児12月)と、pp108-111「かるた遊び」(5歳児12月)の部分実習指導案を単著で担当している。</p> <p>編著・宮川萬寿美、著者・神宮咲希 ほか</p> <p>「かへりみ—『かへりみ』をうたう防人歌」(p.116～131)</p> <p>「かへりみ」の表現は柿本人麻呂作歌をはじめ、万葉集第一期から主に宮廷官人の歌に見られる表現である。元々は、大切なものとの別れに対する未練の表現であったが、大伴家持は「かへりみしない」とうたうことで天皇への忠誠を誓う表現として展開させた。東人がうたう防人歌にも「かへりみしない」表現は見られるが、それは家持のうたいぶりの模倣ではなく、決して振り払うことのできない強い未練を訴えているのである。</p> <p>また、同じ東人がうたう東歌には「かへりみ」が見られないことを追求し、防人歌と東歌の歌の舞台の違いが表現の違いに影響していることを論じている。</p>
<p>(学術論文)</p> <p>1. 「事の語り言も此をば」考—終末に置く詞章としての意味—</p> <p>2. 女の引き留め歌</p>	<p>単</p> <p>単</p>	<p>平成25年2月</p> <p>平成25年2月</p>	<p>國學院大學 1008 研究室 万葉集と東アジア第五号『上代歌謡研究1』</p> <p>國學院大學 1008 研究室 万葉集と東アジア第五号『上代歌謡研究1』</p>	<p>『古事記』の八千矛の神の歌物語は「事の語り言も此をば」が必ず最後に歌われる。本稿は「事の語り言も此をば」がどういった意味を持つ詞章であるのかを考察し、さらに歌の末尾に同様の詞章が繰り返されることの意味についても考えた。そしてこの詞章が、始祖神話を語る際にその神話の重要性を保証しているということ、加えて歌を歌い継ぐ際に次の歌い手へ歌を促す機能をもつということ結論とした。</p> <p>『古事記』5番歌謡を対象作品として取り上げ、男女の歌掛けにおいて女が男を自身の元へ留めておくために歌われる引き留め歌について考察した。特に神話歌謡においては、尊守されねばならない恋愛の秩序があ</p>

<p>3. 『万葉集』東歌の防人歌 【査読論文】</p>	<p>単</p>	<p>平成 25 年 3 月</p>	<p>國學院大學大学院『文学研究科論集』第四十号</p>	<p>り、当該歌謡はその秩序のなかで葛藤する女神の愛の歴史を歌った歌であると言えよう。</p> <p>『万葉集』巻十四に載る五首の防人歌を対象作品とし、防人歌がどのように歌われ得たのかについて考察した。東歌と防人歌を比較して分析を行うと、感情を述べる表現においての類似が見出される。しかし、その感情を向ける対象は、東歌が恋人であるのに対し防人歌は家族にむけて思慕の情を述べており、同じ東人の歌でありながら違いが現れる。以上のことから防人歌とは、歌い方の基盤に東歌の歌唱システムを置きながらも、別離に際して家族への愛を発見して歌われた歌であることを提示した。</p>
<p>4. 歌掛けの機能性—『古事記』一五～一九番歌謡をめぐって—</p>	<p>単</p>	<p>平成 26 年 2 月</p>	<p>國學院大學 1008 研究室 万葉集と東アジア第六号『上代歌謡研究 2』</p>	<p>『古事記』一五～一九番歌謡の五首を対象作品とし、古代歌謡の歌唱システムについて考察を行った。男女の歌掛けには様々な段階があり、当該歌謡五首からは、まず初めに歌掛けの相手を探し、意中の人と歌掛けによる恋愛をし、最後に別れるという歌の流れが見出された。また、歌掛けの歌謡は集団歌謡であり、そこで歌われる歌謡には必ず聴衆が存在するのである。当該歌謡の解釈においても聴衆を想定することで、当該歌謡のエンターテインメント性が明らかとなった。</p>
<p>5. 愛の覚悟を示す歌—『古事記』七九番歌謡を中心に—</p>	<p>単</p>	<p>平成 27 年 2 月</p>	<p>國學院大學 1008 研究室 万葉集と東アジア第七号『上代歌謡研究 3』</p>	<p>『古事記』七九番歌謡について、詞章の検討を通して考察した。そこから、当該歌謡が世間の好奇の目にも負けず愛しい者との愛を貫くことを主張していることが分かった。そうした歌が男から集団に向けて歌われることで、集団の中にいる女性たちの興味がその歌手の男へ寄せられ、女が歌いかえすことで男女の歌掛けが出發するのである。すなわち本稿では当該歌謡を、歌掛けに女性を誘い込む〈誘い歌〉として位置付けた。</p>
<p>6. 「大伴家持の防人関係長歌—防人の情と為る歌の形成—」 【査読論文】</p>	<p>単</p>	<p>平成 27 年 3 月</p>	<p>國學院大學國文學會『日本文學論究』第七十四冊</p>	<p>大伴家持が防人関係長歌を詠出したことの意義を「防人の情」と為るという作歌態度が示される家持の防人関係歌から考察した。防人管理の直接的な責任者である兵部少輔の家持が、管理される防人たちの情に為ろうとする態度は、中国の辺塞詩と類似する。それによって、『詩経』の国風や楽府に見える辺塞詩の「風」の思想やその文芸化についての理解が大伴家持にあることが知られるのである。すなわち、家持が風の性格をもつ辺塞詩を詠む行為は、それを風の歌として位置付ける意図があったのではないかと想定されるのである。</p>
<p>7. 「大伴家持の防人関係長歌三首の構成とその主題」</p>	<p>単</p>	<p>平成 28 年 1 月</p>	<p>國學院大學大学院文学研究科『東アジア文化研究(东亚文化研究)』第 1 号</p>	<p>大伴家持が防人たちの別離の悲しみにこだわる理由を、『尚書』の「詩言志、歌永言」を始発とする古代中国の詩の理念に求めて考察した。この理念は古代中国文学に広く影響を与え、日本では『古今和歌集』を成立させる概念として展開した。大伴家持が風の歌として成立させた防人関係長歌は、防人たちの〈民の悲しみ〉の声に応答する歌であるといえよう。</p>

<p>8. 防人歌の歌唱構造—武蔵国防人歌をモデルとして— 【査読論文】</p>	<p>単</p>	<p>平成 29 年 6 月</p>	<p>『東アジア比較文化研究』(16)</p>	<p>『万葉集』巻二十に載る武蔵国防人歌をモデルとし、防人歌がどのようにしてうたわれたのかを考察した。武蔵国防人歌は、複数の部民によって構成された集団の歌掛けの中でうたわれた歌が収録されている。特に夫婦で収録されている歌に注目してみると、それぞれの歌の表現や発想はその他の歌との交流を通して影響を受けていることが見出される。 4423 番歌を分岐点に、4424 番歌へと展開する歌掛けのルートAと、「峠を越えていく防人の姿を見つける」と返す歌へと展開する歌掛けのルートBが想定される。歌掛けがルートAへと展開した場合は、その歌掛けを共有する集団がより深く悲しむことのできる歌の流れが生まれ、歌掛けがルートBへと展開した場合は、その歌掛けを共有する集団の心を励ます歌の流れが生まれると考えられる。</p>
<p>(その他) 【口頭による学会発表】 1. 東アジアの家族像—防人歌の文学性を探る— 【国際大会】 2. 『万葉集』東歌の防人歌 3. 『大君の命かしこみ』考—防人歌の九首をめぐって—</p>	<p>単 単 単</p>	<p>平成 23 年 8 月 平成 24 年 11 月 平成 25 年 7 月</p>	<p>日韓次世代学術フォーラム第8回国際学術大会（韓国釜山市・東亜大学校） 國學院大學國文學會秋期大会（日本・國學院大學） 國學院大學國文學會7月例会（日本・國學院大學）</p>	<p>・防人歌とは律令制の成立に伴い、必然的に発生した万葉歌である。そこには防人制度成立によって東国の家族像がゆらいだことで発見された、東人の家族愛が歌われている。このような「民衆の家族愛の発見」は日本独自の現象ではなく、東アジア文化圏において共通するものである。古代中国の『玉台新詠』には防人歌と等質の家族愛が見えることから、防人歌の家族を思う性格は東アジア文学として位置付けられるのである。 ・巻十四に東歌の一部として収録される防人歌の成立過程について考察を試みた。防人歌と東歌とは性質が異なるが、いずれも即興的であること、一方が家族への愛やその別れを悲しむ歌であること、一方が異性への愛やその別れを悲しむ歌であることを考えると、防人歌は東歌の発想を踏まえて歌われたことが考えられる。東歌の性質に、「別離を強いられる防人」という条件が加わることで、男女の愛から家族の愛へと展開することで成立したのだと結論した。 ・防人歌の多くは故郷に残して来た家族を思う気持ちが歌われたものである。しかし、国境警備という役目を負わされた「防人」による歌であることから、研究史上の防人歌の理解は国の情勢に大きく影響を受けてきた。特に、第一次世界大戦から第二次世界大戦中の防人歌の解釈は、戦争賛美の道具として用いられていると言っても過言ではないほど、防人歌の表現とは大きくかけ離れたものとなった。本発表では、防人歌の研究史を整理した上で、「勇ましい防人の歌」として理解されてきた九首を対象として歌の再考察を行った。その結果、『万葉集』に載る防人歌には勇ましい歌は一首存在せず、全てが家族との別れを悲しむ歌であることを述べた。</p>

<p>4. 大伴家持の防人歌収集と防人関係長歌の詠出 【全国大会】</p>	<p>単</p>	<p>平成25年12月</p>	<p>全国大学国語国文学会 第108回大会 (日本・宮崎観光ホテル)</p>	<p>『万葉集』巻二十に収載される天平勝宝七歳の防人歌には、防人やその家族の歌と共に、大伴家持が詠んだ防人関係長歌が三首ある。家持は天平勝宝七歳に防人歌を収集し、防人への悲しみを詠んだことには、家持の「君臣一体の政治」を求める政治観が関係しているように思われる。本発表では、家持による天平勝宝七歳の防人歌収集と防人関係長歌三首の詠出の背後には、周代の政治を理想とした家持による、防人の悲しみの理解があったと結論した。</p>
<p>5. 詩学と政道—大伴家持の防人関係長歌の成立— 【国際大会】</p>	<p>単</p>	<p>平成26年11月</p>	<p>第1回 南開大学—國學院大學院生学術フォーラム (中国天津市・南開大学)</p>	<p>本発表では、大伴家持が抱く詩学と政道を明らかにし防人関係歌がどのように成立したのかについて考えた。防人関係歌には『尚書』の〈民本〉の思想に接続する理解から生ずる家持の詩学が見出せる。歌の内容も『詩経』「陟岵」(魏風)と等質であり、兵士たちの別離の悲しみを詠むことが上(支配者)を風刺する「風」の詩と成り得ることが知られる。その詩学をもってすれば、家持の防人関係歌も兵役へ向かう防人たちの別離の悲しみが詠まれていることから、「風」の歌として位置付けられると言えよう。さらに魏文帝曹丕が詠んだ「燕歌行」との対比からは、家持の「文章経国思想」が知られるのである。</p>
<p>6. 大伴家持の防人関係歌詠出の意義—「防人の情と為りて思を陳べて作れる歌」をめぐって—</p>	<p>単</p>	<p>平成26年11月</p>	<p>國學院大學國文學會秋期大会 (日本・國學院大學)</p>	<p>中国には辺塞詩と呼ばれる詩群がある。辺境へと派遣される兵士の悲しみを詠む詩であり、古くは『詩経』に始まる。それらは歌いものとして樂府詩にも見られる。本発表では、家持がこれらの辺塞詩に触れて自身の防人関係歌へと展開したこと、そうした家持の態度には、民に思いを寄せてその悲しみを共有するという(歌人としての家持)の立場が認められることを明らかにした。そして、そこにこそ家持が防人関係歌を詠んだことの意義があることを論じたものである。</p>
<p>7. 防人歌の歌唱システム—武蔵国防人歌をそのモデルとして— 【全国大会】</p>	<p>単</p>	<p>平成28年6月</p>	<p>東アジア比較文化国際会議 (日本・二松学舎大学)</p>	<p>本発表では、『万葉集』巻二十に載る武蔵国防人歌をモデルとし、防人歌がどのようにしてうたわれたのかを考察した。武蔵国防人歌は、複数の部民によって構成された集団の歌掛けの中でうたわれた歌が収録されている。特に夫婦で収録されている歌に注目してみると、それぞれの歌の表現や発想はその他の歌との交流を通して影響を受けていることが見出される。4423番歌を分岐点に、4424番歌へと展開する歌掛けのルートAと、「峠を越えていく防人の姿を見つける」と返す歌へと展開する歌掛けのルートBが想定される。歌掛けがルートAへと展開した場合は、その歌掛けを共有する集団がより深く悲しむことのできる歌の流れが生まれ、歌掛けがルートBへと展開した場合は、その歌掛けを共有する集団の心を励ます歌の流れが生まれると考えられる。</p>
<p>8. 防人歌と「大君の命かしこみ」 【全国大会】</p>	<p>単</p>	<p>平成29年7月</p>	<p>美夫君志会全国大会 (日本・中京大学)</p>	<p>本発表では、「大君の命かしこみ」という天皇への誓詞を基本的性格とする表現が、別離の悲しみをうたう防人歌に表れている理由を考察した。「大君の命かしこみ」は、都人の表現である。都人はこの表現を、官命を受けての旅の歌で定型のまま詠む</p>

			<p>が、防人歌は「障へなへぬ命」と言い換え防人としての旅立つ不満を表している。</p> <p>こうした防人歌は、天平勝宝七歳の防人派遣の責任者であった大伴家持によって収集されたが、大伴家持は自身の「命」意識によって「みこもち」と「大君の命かしくみ」という表現を使い分けている。防人歌の「大君の命かしくみ」が、家族との別離の悲しさを訴える歌ばかりが残されているのは、収集した大伴家持の「命」意識が反映されているためである。</p>
その他（表彰等）			